

植 物 研 究 雜 誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第 31 卷 第 7 号 (通卷第 342 号) 昭和 31 年 7 月 発行

Vol. 31 No. 7 July 1956

黒 川 遼*: 日本産地衣類雜報 (2)**

Syo KUROKAWA*: *Notulae miscellaneae Lichenum japonicorum* (2)

(2) **Leptogium palmatum** (Huds.) Mont. in Webb. & Berth., *Nat. Canar.* 3 (2): 128 (1840).

var. **fusidosporum** Kurokawa var. nov.

Thallus subascendens, membranaceus, usque 2-3 cm latus, 0.11-0.15 mm crassus, isidiis rhiziniisque destitutus, irregulariter sinuoso-laciniatus, laciniis flexuosis, subcanaliculato-corniculatis vel subpalmato-dilatatis, 1-2.5 mm latis, margine subintegris, revolutis, subcucullatis, supra

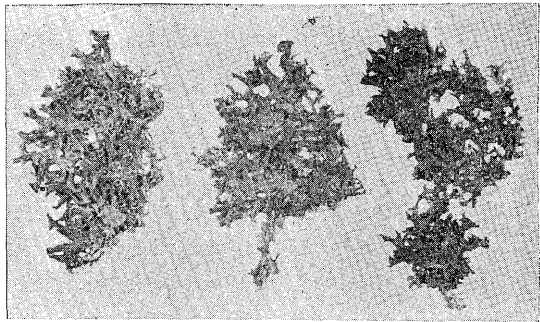


Fig. 5. *Leptogium palmatum* (Huds.) Mont. var. *fusidosporum* Kurokawa ($\times 1$).

leviter reticulato-rugulosus, plumbeus vel rufo-fuscescens, subtus pallidus, rugulosus, tomento destitutus. Thallus superne inferneque strato corticali (ca. 9μ crasso) e serie simplice cellularum formato instructus, strato medullari $90-130\mu$ crasso goniidiis nostocacis.

Apothecia dispersa, subsessilia vel subpedicellata, lecanorina, 0.2-0.4 mm lata, disco rufescente, persistenter concavo, margine integro; excipulum proprius (excipulum strato parenchymatico partis centralis. ca. 40μ crassum; stratum corticale e serie simplice cellularum formatum; hymenium ca. 200μ altum, superne lutescens;

* 資源科学研究所 Research Institute for Natural Resources, Shinjuku, Tokyo.

** 資源科学研究所業績 第 794.

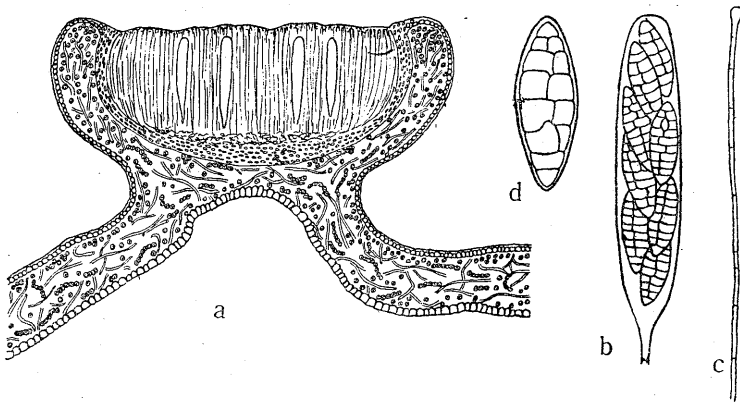


Fig. 5. *Leptogium palmatum* var. *fusidosporum*. a: Transversal section of apothecium and thallus ($\times 70$). b: An ascus with spores ($\times 350$). c: A paraphysis ($\times 400$). d: A spore ($\times 700$).

paraphyses apice leviter clavato-incrassatae; asci subcylindrici vel clavato-cylindrici, 110–140 μ longi, 20–30 μ crassi, Jodo+coerulescentes; sporae 8-nae, decolores, fusiformes aut ellipsoidea-fusiformes, murales, apice obtusae vel subacutae, 30–34 μ longae, 9–12 μ crassae, septis transversalibus 1–3, septis longitudinalibus 6–9.

A typo differt fusiformibus aut ellipsoideo-fusiformibus.

Reaction: Th. K–, C–; med. K–, C–, PD–.

Hab.: Inter muscos ad saxa, mt. Ryogami, prov. Musasi, Honsyu (Kurokawa no. 550523—Holotypus in herb. Dr. Y. Asahinae et isotypus in herb. meo.

Leptogium palmatum (テガタアオキノリ 新称) は欧州, 北米で屢々採集され, 中国, 印度, カナダ, アラスカ, アフリカにも産することが知られているが, 日本では未記録である。1955年11月秩父, 両神山山麓で外形が基準種とよく合致する地衣を稍々多量に採集した。

葉体の内部構造も欧州産の基準種とよく合致する。朝比奈博士所蔵の欧州産の標本がすべて無子器であるため子器の構造を比較することはできなかったが, 記録によれば基準種の胞子はすべて卵形である。これに対して, 今回得たものの胞子は紡錘形または楕円状紡錘形であつて, この点で両者は一致しない。したがつて, 胞子の形状を重視するならば両者は別種とも考えられるが, 従来, アオキノリ属地衣の分類に際しては, 胞子の形よりも葉体の構造や子器の構造が重要視されているので, 今回の採集品を, ひとまず新変種として報告する。

本変種は, 高さ約 3m の露出した岩石上の蘚類の間に生育していたが, 欧州, 北米産のものは泥の上に直接生育していると報告されているので, 生態的にも基準種と異つ

ているようである。しかし、今回はじめて採集されたものであるから、これらの点に関する検討は後日を期したい。

(3) **Anzia opuntiella** Müll. Arg. in Flora 74: 112 (1891).

Asci clavati, ad apicem incrassati, multi-spori, 45-55 μ longi, 19-23 μ crassi; sporae decolores, simplices, lunatim curvatae, 17-20 μ longae, 1.5-3 μ latae.

Specim. exam.; Ad corticem arbori, mt. Siraiwa, prov. Musasi, Honsyu (Kurokawa no. 510337).

本邦内においては、本種は通常多数の子器を着けているにも

かかわらず、成熟した胞子は長い間発見されなかつた。しかるに、1951年に秩父、白岩山で採集した標本の子器の断面を鏡検したところ、たしかに成熟した胞子と認められるものが多数発見されたので、子嚢および胞子の形状を、ここに報告する。

var. **ryogamiensis** Kurokawa var. nov.

Thallus foliaceus, cinerascens vel cinereo-albidus, opacus vel subnitibus, sorediis et isidiis destitutus, laciniatus, laciniis fere linearibus et subaequilatis, ca. 1 mm latis, leviter convexis, dichotome ramosis, apice haud palmatis, margine cum strato spongioso nigro cohaerentibus, strato corticali ca. 40 μ crasso, strato medullari simpliciter, stuppeo praesertim in parte inferiore cum materia albidia repleto, inferne strato spongioso confluentibus, gonidiis subglobosis, ca. 7 μ latis, sub cortice praeditis, pulvino spongioso subgloboso, interrupto, ex hyphis nigris ca. 8 μ crassis laxè intricatis formato, subtus nudus, niger, rhizinis paucis substrato affixis.

Apothecia sessilia, cupuliformia aut demum applanata, 2-4 mm lata, margine integro et disco badio praedita; hymenium 90-110 μ altum, superne anguste fuscens, Jodo partim coeruleus; hypothecium decolor, 23-35 μ altum; excipulum proprius usque ad 30 μ altum; asci clavati, ad apicem incrassati, multi-spori, 45-55 μ longi, 19-23 μ crassi; sporae decolores, simplices, lunatim curvatae, 17-20 μ longae, 1.5-3 μ latae.

A typo recedit, laciniis angustioribus, fere linearibus et subaequilatis, apice haud palmatis.

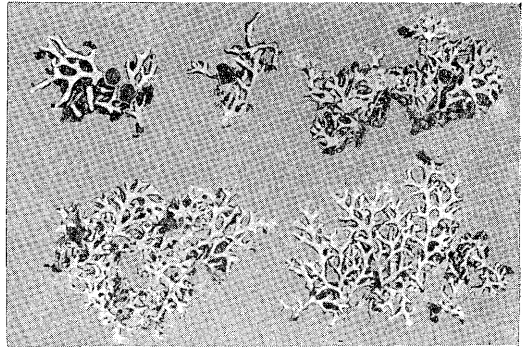


Fig. 7. *Anzia opuntiella* Muell. var. *Arg. ryogamiensis* Kurokawa ($\times 1$)

Reaction: Th. K+flavescens; med. K-, C+rubens, PD-.

Mat. chim. propr.: Atranorium et acidum anziaicum.

Hab.: Ad saxa, mt. Ryogami, prov. Musasi, Honsyu (Kurokawa no. 550620
—Holotypus in herb. Dr. Asahinae et isotypus in herb. meo).

ここに新変種として発表した地衣は、1955年11月武蔵国、両神山の山頂附近の岩石上で採集したものである。髓層が単一の菌糸層より成り、アンチア酸を含み、下面に近い髓層に多量の結晶を析出している点で基準種とよく一致する。しかし、裂片は狭く、ほぼ一様な巾をもつていていわゆる「サボテン」状を示すことなく、又先端で掌状に分岐しない点などで基準種と異なる。

○東京附近に於ける3種の蘚の産地 (水島うらら) Urara MIZUSHIMA: On three mosses found in the vicinity of Tokyo,

(1) Weisiopsis Cardoti Broth.

W. Cardoti に就ては野口彰博士が本誌 26: 129-134 (1951) に同属の検討を發表された際詳しい説明をしておられる。その挙げられた研究標本の産地を見ると日向、土佐、摂津、播磨、備中、伊勢、紀伊等である。最近筆者は武蔵、八王子市 (旧横山村) 東京林業試験場浅川分室の実験林内で同種を採集した。生育地は北西を山で限られ、南に低く、同林内では温暖な場所と思われる。粘板岩上に積つた関東灰土 (赤土) 上に少量生育していた。植物体は繊弱で葉形、蒴柄、蒴胞、蘇齒の構造等は野口博士の記載によく一致する。同種の伊勢、紀伊以北の産地として報告する。

(2) Distichophyllum maibarae Besch.

桜井久一博士は「日本の蘚類」7 (1954) に *D. maibarae* が奥武蔵、梅園村、黒山 (筆者採集の標本) に産するのは北限地と認むべき特筆すべき産地であると述べておられる。確かに同種は東京附近では非常に珍しいもので筆者も同地で採集した他その産地を知らない。然し最近野口博士の御好意により上野、筑波山産の同種標本を見る事が出来た。又樋口利雄氏は「福島県の蘚類」45 (1955) に伊達茂庭の産地を挙げておられる (標本未見)。それ故 *D. maibarae* の北限地は東京附近ではなく更に北上していて恐らく暖流の影響や地形等の条件で微気候が温暖である場所には点々と分布しているのではないかと思う。ちなみに黒山では谷の入口で日光照射の充分な赤土の崖にうがたれた穴の中に生育しており、常に穴の上部から滴り落ちる水に潤されていた。

(3) Fontinalis hypnoides Hartm.

Fontinalis 属の蘚類は我国中部では主に山地の植物であると思つていたが松山庫三氏が「武蔵野植物記」184 (1948, 内田老鶴園) に書いておられるように *F. hypnoides* が東京都下、調布市 (旧神代村) 深大寺境内の養魚池及びそれから流れ出る野川 (川の名) の諸所、灌漑溝等に生育している。これらの水の源は深大寺境内に湧出する泉である。深大寺は武蔵野台地の第二段目に位置する事から見て、この分布は同じく武蔵野に産するイブキスミレ、シギンカラマツ、クロツバラ等の我国中部では山地植物と考えられる高等植物の分布と軌を一にするものと思われる。高木典雄氏は大分以前に深大寺養魚池でこの蘚を採集されたそうであるが、当時は相当繁茂していたように伺つた。然るに筆者が1951年に三回同地をおとすれた時はその都度に減少つたようであつて、其の後桜井博士が赴かれた時は遂に見出し得られなかつた由である。或は滅亡に瀕しているのではないかと思われるのでここに記録して置き度い。深大寺養魚池には *F. hypnoides* の外、*Rhynchostegium riparioides* (= *Platypridium rusci-forme*), *Vesicularia japonica*, *Leptodictium riparium* 等を産する。尚、松山氏はクロカワゴケ (シミズゴケともいう) なる和名を用いておられるが、これは筆者が松山氏に誤つて御伝えしたもので正しくはカワゴケであり、御記せねばならない。「日本の蘚類」の97頁に *F. antipyretica* が神代寺 (深大寺の誤り) にあると出ているが之は筆者の採集品に基いたものである。*F. antipyretica* は葉に明かな竜骨を有する節に入り生品では特に良く分る。然るに深大寺のものは葉背に全く竜骨を認めぬ別の節に属し、筆者は標記の如く *F. hypnoides* に当てる。

最後に資料を恵まれた桜井久一、野口彰、高木典雄、松山庫三、樋口利雄の諸氏に御礼申し上げます。